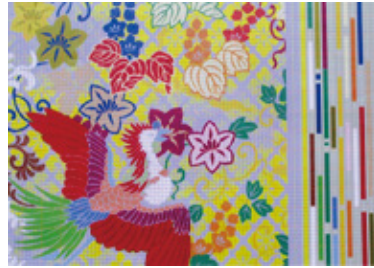


二条丸八の織物歴史



①空引機〜ジャガード機

織物は、江戸時代までは2人1組で織機を操作する空引機で織られていました。その後、明治5年に西陣の若者フランスに渡りジャガード織機を研究し、ノウハウを持ち帰り、今の西陣の基礎を作りました。トヨタ・日産は、このジャガード織機の仕組みを取入れて発展しました。



②紋図

口数、組織、地越数ごとの方眼紙に、実物の6倍の大きさで図を書き、色を塗ってメートルを作り、これに基づいてピアノマシンで1枚ずつ紋紙を作成します。ベテランの紋彫師でも1日1,000枚がやっとでした。また、方眼紙の種類も、かなりの数を必要としました。



③紋紙

これは900口の紋紙で、帯なら2〜3万枚の紋紙数。打掛では2尺5寸の柄の織物で4万枚前後。総絵羽の打掛になれば25万枚くらいになり紋紙業者に依頼すると紋紙1枚100円かかり、1つの柄の紋紙制費用は約2,500円かかりました。



④従来のジャガード織機

従来の織機は、白生地や紋付等の比較的、紋紙枚数の少ない織物向きで、総絵羽の打掛を織るには、紋紙枚数が多くなりすぎて製織は不可能でした。



⑤総絵羽の紋紙の量

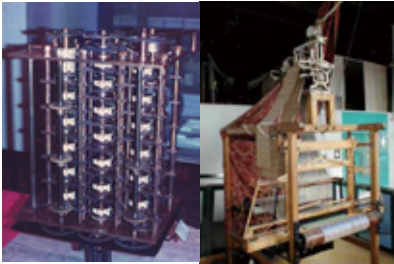
総絵羽の打掛を織るとすると、約27万枚の紋紙が必要なので、体育館ほどの大きさの建物に織機を1台入れ、紋紙を2,500枚程度ずつ順番に並べて、上げ下げをしながら織る事になるため、物理的にも効率的にも非常に悪く織るのとは不可能でした。



⑥直織システム

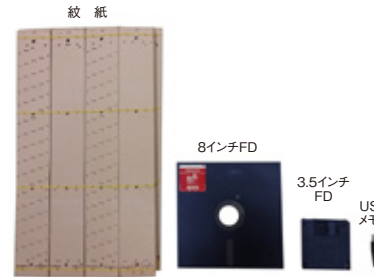
弊社がコンピュータを使って、日本で初めて、直織システムによる織物作りしたのは昭和50年代半ばです。西陣の業者からは「二条丸八は潰れる」と噂されましたが、当初28億円の売り上げの内、直織システム導入に10億円を投資し開発しました。その頃は紋紙製作に、年間1.8億円ほどを支払っていました。

▼コンピュータの原型である自動計算機 ▼初期のジャガード織機



⑦織物とコンピュータ

コンピュータの原理はジャガード織機が始まりといわれています。私たち人間は、日常生活では10進法を使っています。時計は60進法です。紋紙は、穴が空いているか、いないかの2進法です。この考え方が飛躍的に進歩したのは軍事面で長距離ミサイルの軌道、ミサイルを放つ時の計算で進歩したといわれています。



⑧紋紙からFDへ

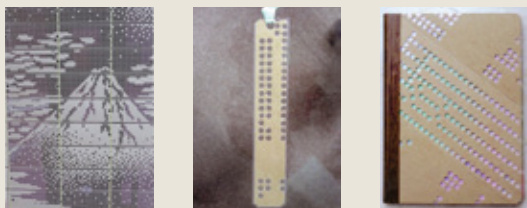
昭和50年代半ばに、直織システムで製織した時には、磁気テープからディスクに入力して織っていましたが、その後、FDの普及によりFDから製織するようになりました。FDも8インチから3.5インチに変わり、現在は、USBメモリに変わろうとしています。
※総絵羽なら約30枚のFDが必要です。



⑨総絵羽打掛

昭和61年(1986年)に、英国ダイアナ妃に中曽根総理を通じて進呈した総絵羽打掛「桐竹鳳凰麒麟洲浜文」は「3億円の打掛」として話題を呼びました。

紋紙を使ったアクセサリ



タベストリー

ストラップ

手帳

日本の伝統を継承しつつ、時代の先端をみつめて。京都は、伝統産業とベンチャービジネスのメッカであり、古き良きものを大切にすると同時に常に新しいものに挑戦する風土をもっています。弊社は、昭和31年より婚礼衣装を製造し、全国の貸衣装店、ホテル、結婚式場のお得意先に販売してきました。伝統の技と最先端技術を駆使し開発した、夢の打掛「総絵羽」の技術をフルに活かし、日本の伝統技術をそこなく育み、新しい可能性を求めて時代の先端を歩み続けたいと考えています。